「障害者」という呼び方について

雲南市立加茂中学校　三年　　平井楠々

「障害者」この呼び方を見たり聞いたりしたとき、何となくマイナスなイメージがわいてくるのは私だけでしょうか。手や脚、その他の機能が低下している、あるいはその機能を消失している人、知的機能が低下している人を私は思い浮かべます。最近では、「障害者」の「害」の字を平仮名で表記して、マイナスなイメージを和らげようという動きが広まっているそうです。実際に私も総合的な学習の時間で福祉について学習をしたとき、「障害者」ではなく「障がい者」と書くように先生に言われました。しかし、「害」の字を平仮名にして書いたときは多少その効果はあるかもしれませんが、聞いた時のイメージは変わりません。やはりマイナスな印象をもってしまいます。

先日、歌舞伎役者の中村獅童さんの子供、夏幹くんが、指が四本で生まれてきたことを公表されているのをテレビで見ました。今元気に過ごしている夏幹くんが大きくなって小学校に上がった時、自分がみんなと違うことに気付く時が来て、壁にぶつかることがあるかもしれない、と話していました。また、アメリカの言葉で「チャレンジド」という言葉があるそうです。「神からの挑戦という課題、あるいはチャンスを与えられた人」という意味があるそうです。障害をマイナスととらえるのではなく、障害をもつゆえに体験する様々な事柄を自分自身のため、あるいは社会のためにポジティブに生かしていこうという想いが込められた呼称だそうです。この呼び方を聞いたとき、素敵だなと感じ、プラスのイメージをもちました。獅童さんは夏幹くんが壁にぶつかったとき、「君は神様に選ばれた人なんだよ。」と言ってあげたいと話していました。

「障がい者」、「健常者」という分け方にも違和感があります。障害があるから不自由なのか…身体の機能が低下していたり失われていたりすることを「健常ではない」と考えるのではなく、一人一人の個性として考えられたらいいなと思います。背が高い、低い。運動が得意、不得意。目が大きい、小さい、というのは特別なことではない、「障害」ではなく「個性」である、という風な社会全体の雰囲気であればいいなと私は思います。

それぞれの個性をもっている「チャレンジド」の人々が暮らしやすい社会であってほしい。「チャレンジド」の人々が、自分たちができないことを悲しむような社会ではなく、どんな個性をもった人も生きやすい社会の仕組み、雰囲気になるといいなと思うし、自分のことを誇らしく思えるような社会であってほしいと思います。今の社会は人間が作り上げたものだから不可能ではない、社会を変えていけるのも人間だと考えます。「チャレンジド」という言葉が広がってほしい、まずはマイナスなイメージを無くすところからだと私は思います。